

高良タイユ―——沖繩・豊見城の昔話——

中村 史

はじめに

「高良タイユ―」は沖繩の豊見城とみぐすくで採録された口頭伝承（昔話）である。語りの資料は、一九八九年（平成元）、一九九〇年（平成二）の夏季、福田晃氏指導の立命館大学・説話文学研究会の調査によって得られたもののひとつである。当時大学院生であったわたしもこの調査に参加したが、豊見城の仕事をまかされたのちには追跡調査も行い、その口頭伝承資料のいくつかについて考察したものを公刊してきた¹。しかし、こうした追跡調査によって解決していない話のひとつが「高良タイユ―」である。そこでこの「高良タイユ―」について、本稿ではひとまず文献や公刊された昔話・民俗資料によって可能になる範囲において考察を試みることにしたい。なお、豊見城は沖繩本島の南部、那覇市の南隣にある市である。調査の当時は村であったので、以下豊見城村と呼ぶことにする。

1 高良ヨシ子さんが語った「高良タイユ―」

はじめに、高良たからヨシ子さんが語った「高良タイユ―」を挙げたい。高良さんは一九一四年（大正三）六月二四日のお生まれ、豊見城村上田うえたのご出身であり、調査当時は豊見城村高嶺たかみねに在住しておられた。ここに挙げる「高良タイユ―」の語りは、一九八九年（平成元）八月二日（水）の調査の際、高嶺公民館にて加藤千代（愛媛大学）、伊芸弘子（那覇市役所）、山本聡（立命館大学学生）、山本淳（立命館大学学生）の四氏が採録したものであり、翻字はわたしが行った。高良さんには、その後、一九九〇年（平成二）八月八日（水）、および、一九九六年（平成八）八月一六日（金）、いずれも伊芸弘子氏が再び高嶺公民館にて面会、採話している。二〇〇一年（平成一三）九月にわたしが面会を申し込んだ際には、ご病気が重いとのことでお会いできず、わたし自身はついにお会いする機会がなかった。高良さんは農業をされてこられる一方、神人かみんちゆうを務められた方であり²、それ

もあつてか、その語りには主観的な傾向があつてわかりにくい
3。

この方(Ⅱ高良タイユ)が、とにかくもう、とっても偉い方なられて、
むこう——。昔は、支那には「唐旅」といって、話はやっていましたんで

すよね、「唐旅」。「唐旅」かけられる人はとっても、学問もあつてあれな
さる人しか、できなかつたらしいですよ。だから、この方が馬乗りで、
とっても馬乗るのが好きだったもんですから、この方が乗った馬が内地
(Ⅱべつの機会には「鹿兒島」とおっしゃっている)に引きあげられたら
しいですよ。内地行つてから、また、この人は、お妻さん探してからに、
むこうでしばらくいたんでないですか。あれからまた、沖繩に帰つていら
して、むこうからまた、「この馬扱う人が、いないから、できないから、
また、高良さん来て、この馬をひき取ってください」と、おっしゃたら
しいですよ。むこうから。だから、この高良さんは、おまんじゅう買つ
て、ふところにいっぱい、おまんじゅう買つて行つてからね、お馬にあげ
て、なれなれして、すかしてからね、この馬乗つて。

したら、このお妻さんが、「今日は、あんた、落とし穴に落とすつもり
で、こつちの人はやつているから、こつちはようつけて、馬にぶちかけて
から、とのがしてよ」とおっしゃつたらしいですよ。だから、この人、
その考えで、やっぱし穴掘つてあるから、こつち来てからは、「どこそこ
に印、わたしが入れてあるから」と言つて、お妻さんが言つたらしいです
よね。これからだいたい、馬ぶちかけてから、とのがして、命を助かつた

らしいよ、この人は。命助かつたから、今度は、この人は怒つてから、「あ
んたは、わたしの命取る、あれだったねえ」と言つて、(馬の)首ちよん
切つたから、これ、ちよん切つた首を海に流したから、那覇の、やっぱし、
なんて言うか、あつち——ワタンジャー、ワタンジャーの、こちに来たら
しいです。「はい、これは高良タイユの馬の首だがねえ」と言つて、み
な珍しがつていたつて。

その方はまた、あとから亡くなられたから、こつち、NHKの下のほう
に祭られていますよね。ほで、祭られているところにまた、馬の首がちよ
んとありますわけ。これがとっても、珍しいということはこれです。うち
らの、九代の、あれ(Ⅱ祖先)になつていきますよ。

さて、わかりにくい語りながら、補いつつこれをまとめてみよ
う。

馬乗り高良タイユの馬が内地・鹿兒島に連れてゆかれ、
「扱いきれないから」と高良タイユが呼ばれた。(そこで、
高良タイユに対するやっかみから、彼を亡き者にしよう
という計略が立てられた。)しかし、彼は「お妻さん」から
(馬場に)落とし穴がしかけられていることを告げられ、
跳躍によつてこの難を逃れた。(馬が裏切り者ということら
しく、)高良タイユが「おまえはわたしの命を取るつもり
だったな」と馬の首を切つて海に流したところ、首は那覇
のワタンジャーに流れついた。高良タイユは死後「NH

Kの下のほう」に祭られ、馬の首もそこにある。高良タイユーは語り手の「九代の」先祖である——

民俗学的方法によるならば、この話はいかに解釈することができるであろうか。民俗学の観点からは、語り手の高良さんが神人と呼ばれるシャーマンであることもまた重要なポイントとなるかもしれない。残念ながら、この語り手から直接に情報を得る機会に恵まれなかったわたしとしては、こうしたこの話のいわば特殊な問題をさて置き、以下はむしろその普遍的性格について、そして、文献やそれに順ずる資料によって可能となる範囲において考察を試みることにしたい。

2 名馬の物語——野国青毛を中心として——

2・1 沖縄の名馬が薩摩、鹿児島へ送られるが、荒馬となって扱えなくなる。沖縄の馬乗りの名手、あるいはもとの主人が呼ばれ、その馬はもとのとおりの良馬にかえる。このあと、彼らを陥れようと馬場にわながしかけられるが、馬はこれを知っており、あるいは沖縄の馬乗りが鹿児島（遊女）と親しくなつてこの企みを彼女から聞いたので、その難をまぬがれた——などというストーリーの話は、多く野国青毛（野国名馬）の話として聞く。城間清豊・自了（野国馬図）によつて描かれたという「野国馬図」⁴は、その図解に、馬術の名人・野国宗保なる人物によつて見立てられ鹿児島に献上される二頭の馬を、琉球奉行・

阿多内膳正に連れて来させ描いたもので、ときに寛永一七年（一六四〇）の五月以前のことであつたと書かれている。この絵は尚王家が所蔵していたという。そこに描かれた二頭のうち、右側の青毛（黒馬）が伝承の「野国青毛」の原像ではないかと考えられ、この伝承の淵源はかなり古いようである。また、『遺老説伝』（尚敬王三三年、一七四五）外卷二末にも「野国名馬」の名のみは見えるものの、この馬に「高良タイユー」とおなじ話型が結びつけられ語られているのが確かめられる比較的古い例は、一九二二（大正十一年）に刊行された、佐喜真興英の『南島説話』。収録のものではないかと思われる。『南島説話』では、「野国名馬」の題のものにつぎのような話を載せている。

某の王世代に野国名馬と云ふ駿馬が居つた。或る年鹿児島の殿様の命によつて某の君が此の馬に乗つて殿様の御前に伺候することになつた。然るに鹿児島の御家中に此の馬をねたむ者があつて、計を以て此を無きものにしやうとし、馬場に陥穽を設けた。然し此の馬はよく此を知つて居たので、その所に来ると一大飛躍をしたので、流石の陰謀も遂に無効に帰した。某の君はその時より馬を徳とし以後子孫絶対に馬肉を食ふを禁じた。（引用）

ほかにもこの話の類話が伝わっている。たとえば、つぎの例⁷がそうである。

この「野国青毛」は北谷間切野国村（ちやたんまぎりのくに）のヤキマージにあつた牧場に出、王の馬別当に見出された。のちに薩摩に献上

されたが、御しきれないとてこの別当が上鹿した。鹿兒島の別当がたくらんだ陥穽おとしあなの件を、沖繩の別当は親しくしていた遊女に知らされ、その難を免れた。沖繩の別当は「馬乗り真喜屋」と呼ばれたと伝えられる。(要約)

この馬の産地を野国村とするほかの例もあり、「野国青毛」の名は北谷間切野国村の馬場から出たことによる命名と考えられる(北谷間切野国村は現在嘉手納町野国であり、嘉手納飛行場となっている)。また、薩摩の人々のまえで野国青毛を乗りこなした人物として、しばしば「馬乗り真謝」が登場するが、いまの資料の「馬乗り真喜屋¹⁰」はおなじ人物であろう。馬乗り真謝が薩摩へ出かける話ではあっても、この人物を中心とした話となっていて、馬の名は伝えられていない場合¹¹もある。この人には野国青毛とは無関係の話、また薩摩行き以外の小話¹²もあり、独立して名の知られた伝承上の人物だと言える。

2・2 さらに、同様の薩摩行きの一件を仲田青毛なかたおぎという馬の話として伝えているもの¹³もある。

仲田青毛は寛永年間(一六二四—四三)に北谷の馬場から出た。薩摩公に献上されたが乗りこなせる者がなく、上鹿してこれをみごと乗りこなしたのは、旧主、「仲田殿内なかたどうんち」の次男仲田親雲上べいしん」だった。薩摩の馬術指南役は彼に落とし穴のある馬場で仲田青毛の調教をさせたが、彼は馬の蹄の音でその存在を知り、馬の跳躍で難を免れた。そして、仲田

親雲上は仲田青毛を連れ無事帰国した。(要約)

この話では仲田青毛は野国青毛とおなじころ、おなじ「北谷の馬場」から出た馬である。しかし、佐敷町で採録された類話では、仲田青毛は「幼馬のころは小谷の馬飼いとして名のある仲新地ジツクワ小(屋号)で飼われ、成馬になってから、仲田殿内に飼いられた」¹⁴とあって、佐敷の小谷おこくの産であることになっている。そして、薩摩の人々のまえでこの馬に乗ってみせた人は、仲田殿内の調教者、「馬乗り真和志(真謝)¹⁵」だったという。したがって、仲田青毛は本来野国青毛とは異なる馬¹⁶であったとしても、伝承のうえでは野国青毛と融合し一体となった存在ではないかと思われる。このような次第で、北谷間切野国村の馬場から出た野国青毛(野国名馬)という像を中心として、馬の名、その産地、あるいはそれを御した人物の像は相当にゆれ動くのである。さらに、名護市屋部やぶの伝承¹⁷になると、暴れ馬となつた仲田青毛を扱いに薩摩へ行ったのは、この馬を飼っていた嘉数カナかかじという人と、馬乗りの名人・野国里のこく之子こ、そしてもうひとり。「薩摩の者は、何するか分らんから、渡嘉敷トウカシチペークーペークーもいっしょに行けよ」と、この頓智の人が同行する——というぐあいに、さらに変容している。なお、ここに渡嘉敷ペークーという沖繩では知られた笑話の主人公が登場していることも着目される。沖繩の伝承や芝居の世界において、渡嘉敷ペークーが薩摩の侍をうちまかす痛快な役割を持たされていることは別稿¹⁸で述べた。琉球国の一大事に対処するべつの説話伝承にま

た、彼はこのように登場させられるのである。

2・3 「武姓家譜」¹⁹を見ればまた、六世の宗保、野国親雲上²⁰（一五九九年—一六七五年）という人の伝記に、野国青毛と酷似する馬があらわれているのを発見する。宗保、野国親雲上は、自了「野国馬図」の図解に記される「野国宗保」（↑2・1）に一致する人物なのであろう。「武姓家譜」によれば、武姓六世の宗保、野国親雲上は父の家統をついで北谷間切野国地頭職に任じたといひ、名馬の記事は崇禎一三年（一六四〇）から一四年の条に書かれている。

崇禎一三年、宗保は大隅守（薩摩藩主）光久公に久米の馬を献上するときに宰領となった。この馬は「中黒馬」といって名馬の評判が高かったが、「不行の曲」があつてだれも乗ることができなかつた。しかし宗保が飼うと三十日あまりで犬のようになれ従ひ、東西飛ぶがごとく乗りこなしたので、在番奉行の阿多氏は彼を宰領とした。崇禎一四年の五月に那覇を發つて薩摩に至つたが、馬の癖はもとのとおりとなつて乗ることができない。島津公が宗保を招き彼に試させたところ、宗保はこれをよく乗りこなした。そして翌日、島津公の見守るなか城の馬場で「秘術の手繩」をもつて飛ぶように走つた。公は感じて「早馬に乗ること琉人に如かず」と言つた。（要約）

この武姓・嘉陽家²¹六世の野国親雲上宗保は、とかく瘤の強い駿馬を乗りこなした、薩摩藩への馬の献上に携わつたなどとい

う記事が多く²²、馬を見、また乗るのに秀でた人物として知られ伝えられていたようだ。崇禎一三年から一四年にかけての記事では、問題の馬が北谷間切野国村の馬場から出た野国青毛ではなく、久米島産の「中黒馬」——これもまた青毛の馬、黒馬のようであるが——となつてゐる。野国親雲上宗保の領地内から出た野国青毛のイメージと伝承とが、なんらかの理由で久米島産の中黒馬の像に取つてかわられ、家譜に記録されたようである²³。「野国馬図」が嘉陽家ではなく、尚家に所蔵されたこともあつて、嘉陽家の伝承にこうした変容が起こつたのであろうか。さらに、自了の子孫であるという方から聞き得た、「野国馬図」の馬が「薩摩（鹿児島）に献上される久米島産の名馬・仲里（別名野国馬）」と伝えられている²⁴との情報もある（自了の子孫という人々のあいだでも、野国馬の産地については混乱しているようである）。確認すれば、中黒馬が薩摩藩に献上されたのは崇禎一三年（一六四〇）五月（↑「武姓家譜」）、自了によつて「野国馬図」が描かれたのは寛永一七年（一六四〇）の五月以前（↑2・1）であるが、野国青毛と伝承のうえではほぼ一体となつてゐる仲田青毛は寛永年間（一六二四—一六四三）に出たと伝えられている（↑2・2）。このように、野国青毛を中心とする変幻自在な名馬の伝承の変容、増殖の一端がうかがわれる。

野国馬場に出た名馬・野国青毛は（仲田青毛もそうであるが）、琉球の歴史上に何頭もいたようである²⁵。しかし、「高良タイ

ユ一」型の話と結びついた野国青毛の原像は尚豊王代の末年、一六四〇年ごろの野国青毛であったと思われる。そうして、この野国青毛の伝承がほかの馬の伝承であったものに取ってかわる、また、知られた馬乗りの伝承と結びついてゆく、さらに、野国青毛そのものがほかの馬に取ってかわられるなどということも起こったと考えられる。このようにして野国青毛は、さまざまな人々の伝記、伝承のなかを駆けぬける不思議な黒馬なのである。

3 与那原の足速馬く石垣島の赤馬節

3・1 野国青毛の話とおなじ話型を取った、べつの馬の伝承をまた聞くことがある。たとえば与那原の「足速馬」の話²⁶。がそうである。ここでは馬を取りあげるのが薩摩藩でなく琉球王府である点が注目される。

与那原の稲福^{いなふく}という家の何代めかの祖先は「馬乗り^{うまぬ}」であった。与那原海岸を散歩していたとき、海のかなたから一頭の馬が泳いできた。これが有名な足速馬である。稲福はこれを連れて帰って調教した。このことが国王の耳に聞こえ、使いが来たので稲福はこの名馬を献上した。そして、王朝の飼育係が訓練したが全然なつかず、乗ることができなかつた。そこで、とうとう稲福を呼び出して返してやることになった。稲福は馬をつれて帰って最後までかわいがり、

死後は墓をつくって葬った。(要約)

ここでは稲福なる人物は献上される足速馬と行をともししていないが、おなじ与那原で採録された類話では、この人物が同行して「首里の人」や「王様」のまえで馬術を披露する²⁷。

また、同様に薩摩に連れてゆかれ面目をほどこすべつの馬の伝承は佐敷町でも見つかる²⁸。

3・2 このように見てくるうちに、とかくこれら名馬の物語がいずれも、薩摩藩であれ

琉球王府であれ、不当な権力の圧迫を受け、ついにはそれを克服するという、一貫したテ

ーマを持つものだとは知られてくるのである。ここで、足速馬の話に実によく似た、八重山、

石垣島宮良の赤馬の伝承が思いおこされなければならない。民謡「赤馬節」の由来として

語られることが多いものであるが、いま喜舎場永珣『八重山民俗誌』下巻²⁹、「馬見岡名称ト赤馬節ノ由来」によってそのストーリーを示せば、

康熙四十一年(一七〇二)、文珪氏四世の大城師番が仲筋村^{なかつし}に若文字^{わかむじ}(「蔵元の下級書記」として勤めていたとき、海辺に得たという赤馬の件は中山の尚真王(「尚貞王の誤り」)の耳に達した。康熙五十三年(一七一四)(「尚敬王代」、(大城師番が)白保村^{しろほ}の目差役であったとき、所望されて

この馬を献上し、「馬見岡」より見送った。このときに別離の情もだし難く、大城師番が赤馬を讃え歌ったのが「赤馬節」のはじまりである。ところが、のちに赤馬が扱えきれないとて大城師番は中山に呼び出され、国王のまえで赤馬に再会・乗馬して駆けまわった。王はこれを賞賛し彼に馬を与えた。このとき師番が喜び歌い踊ったのが「赤馬節」の続きである。(要約)

と、野国青毛や足速馬の伝承とよく似た展開をとげるものである³⁰。(とくに足速馬の伝承は、馬を見出す部分において赤馬の伝承と酷似している)。この馬のことを歌う石垣島の民謡「赤馬節」の歌詞の方は、琉球国王にお目通りする名誉を歌うという内容を持ち、祝宴の席で歌われるものとなっている³¹。

4 不当な権力の克服

薩摩藩に対する憤りとささやかな抵抗の精神は沖縄の昔話の重要なテーマである。「姥捨山」(難題型)の話型を取り入れた「モーイ親方」³²や、琉球王国が薩摩藩の侵略を受けた際の英雄たちの最期を語る「チヨーハグン親方」「謝名親方」がその代表的なものであり、またさきに挙げた「渡嘉敷ペークー」もそういった性格を持つ。ここに「野国青毛」から「高良タイユー」、赤馬節までの名馬の伝承を追加すべきであるが、この伝承のとりわけ興味深い点は、薩摩に支配される琉球王国とい

う構図のみならず、琉球王国の支配を受ける人々、また、先島の八重山という、さらに下部の構造にまでかかわってくるという点である。すなわち、辺境の地にあった外様大名の薩摩藩は江戸幕府によってさまざまな経済的圧迫を加えられたという歴史を持つ。薩摩藩はひとつの方法として琉球王府からの収奪によつてこれを解消しようとした。それらの苦しみはそのまま琉球王府支配下の人々、また、宮古、八重山の人々に転嫁されることとなった(こうした構造の末端に位置した波照間、与那国島の人々はしばしば南の海上の理想境、ハイ・ハテルマ、ハイ・ドナンをめざして島を脱出した、という伝承もある)。この悲しい構造のそこ、ここに、不当なる支配者の権力に屈しないものたち(馬あるいは人)のあったことを伝える名馬物語群がかいま見える。高良ヨシ子さんの語る「高良タイユー」はそのうちのひとつである。ただひとつ悲しいのは、高良タイユーの馬が裏切り者として主人の手にかかり、殺されなければならなかったことである。なぜこの馬ばかりがおなじ沖縄の同士ではなかったのか、という思いがある。いまは、高良さんの「高良タイユー」があくまでも先祖の英雄的行為をほこらかに伝えることに傾き(薩摩への怒りさえここでは希薄になつていくかのようである)、馬乗りの高良タイユーを中心として語るものとなつていくと考えておく。こうした疑問にさらに具体的に答え得るのが民俗学の方法であるのかもしれない。

注

¹ 本稿はシリーズ『琉球の伝承・文化を歩く』（三弥井書店）の一巻として公刊される、安里和子氏と発表者担当の豊見城編・執筆準備のためのものである。このシリーズは、専門家のみならず、琉球・沖縄、また民俗・民間説話に関心をもつ一般読者をも対象とする。語りの資料（標準語、方言）約四十にそれぞれ平易な解説を施す予定。前記の解説を書く基盤とするためにすでにまとめ公刊した拙稿はつぎのとおり。

「沖縄・豊見城の昔話」〔奄美沖縄民間文芸研究〕第一八号、一九九五年一月

「沖縄・豊見城村の『瓦屋節由来』」〔立命館文学〕第五二二号、一九九八年一月

「沖縄・豊見城村のキジムナー話」〔人文研究〕第九五輯、一九九八年三月

「沖縄・豊見城村の伝説『真玉橋の人柱』」〔人文研究〕第九七輯、一九九九年三月

「宜保チマシー——沖縄・豊見城の世間話いくつか——」〔人文研究〕第一〇六輯、二〇〇三年九月

「渡嘉敷ペークー話——沖縄・豊見城の笑話——」〔立命館文学〕第五八三号、二〇〇四年二月

「ガーナムイ——沖縄・豊見城の伝説いくつか——」〔人文研究〕

第一〇七輯、二〇〇四年三月

² 神人は、奄美諸島以南の南島に広く見られるシャーマン、ユタに類似する存在である。なお、高良ヨシ子さんの生い立ちや「成巫体験」については福田晃氏による報告がある。『神語り・昔語りの伝承世界』「調査報告 沖縄・豊見城の神女・神人」〔第一書房、一九九七年〕。

³ とりわけ高良タイユウの墓があり馬の首もあるという場所がどこであるのか、いまのところわからない。一九九〇年、一九九六年の調査の際にも、高良ヨシ子さんご自身からおなじ話が採録されているが、その語りは一層とらえどころがなく難解なものになっていて、高良タイユウの墓の場所は明らかにならない（このときのカセットテープは録音の状態も非常に悪い）。なお、一九九〇年の調査のときには、同席していた大城源誠さん（一九一〇年〈明治四三〉一月八日生、高嶺在住）、大城政吉さん（一九一一年〈明治四四〉九月五日生、高嶺在住）からも、高良タイユウについての語りを採録しているが、おふたりは墓の位置について言及しておられない。高良タイユウの墓の位置について高良さんから得た情報を解読して以下に示してみる——まず、前掲の一九八九年の語りでは「NHKの下のほう」とあるが、高良さんはこの語りの直後にその場所を言いかえて、渡嘉敷（高嶺の西側に隣接する集落）のほうの、宮古からの船が入りする「宮古岩」というところで、高嶺の「古島」であった、ともおっしゃっている。高嶺集落はかつて現在の位置の西側から移住してきた、すなわち、現在位置の西側に高嶺の古島があるといったことは村史〔豊見城村史〕（豊見

城村役所、一九六四年（四三三頁）にもおおよそ記され、比較的知られた知識である。しかし、このあたりにNHKの施設はない。一方、一九九〇年の調査では「嘉敷真地のNHKの下」とおっしゃっている。

このNHKとは一帯が高台となっている豊見城村（市）高安にあるNHK放送センターのことなのであろうか。高嶺の古島と高安のNHK放送センターの下では全く矛盾があり、語り手自身にも確認する機会のないままとなっている（前述のように、二〇〇一年九月には面会できなかつた）。なお、高良タイユウの馬の首が流れついたという「ワタシジャー」は渡地のことである。これは、現在の那覇市東町、那覇港に面したあたりにあり、琉球王府時代には辻、仲島とともに遊郭でも知られていた場所である。

4 『國華』第四二編・第二冊・四九五号、一九三二年二月。この絵がつぎに挙げる新聞記事の絵と同一のものではないかと思われる。すなわち、一九八三年（昭和五八）一〇月三日（月）付の『沖縄タイムス』に「自了の『馬の絵』と題する記事があり、自了の子孫であるという米須清徳さんが、自了最後の作品とされる、黒毛、赤毛の二頭の馬を描いた『馬の絵』を所蔵していると、絵の写真を添えて報道されている。それによると、尚家の所蔵であったこの絵を、一九六一年（昭和三七）六月に沖縄史家の東恩納寛惇氏の仲介によって尚家から譲られたのだとある。

5 『女人政治考・霊の島々 佐喜真興英全集』（新泉社、一九八二年）「動物に関する話」（二二五）。

6 佐喜真興英自身この話の出所についてつぎのように記している。「此は亡養父に聞いた。王名、乗馬者の名をも詳しく聞いて居たが、今はすっかり忘れてしまった。父は若年の時首里で教養を受けた人である。此の話も固より首里で聞いたことであらう」。

7 真栄城兼良編『北谷村誌』（北谷村役所、一九六一年）四〇八頁。

8 このあたりは、『遺老説伝』外巻二末の「御宝瀬馬」の伝承に似る。

9 『嘉手納町史』資料編2（民俗資料）（嘉手納町役場、一九九〇年）六四五頁。

10 このルビは原文に付いているものだが、漢字と読み（表記と発音）が食いちがつている。「真喜屋」の漢字を当てるのは「まぎや」という名前、「真謝」を当てるのが「まーじゃ」である。おそらく、ここで「真喜屋」の書き方は、「真喜屋」の文字ではなく、「まーじゃ」の読み（音）のほうが正しいのではないか。つまり、「まーじゃ」という音で伝承していた馬乗りの名前に「真喜屋」の文字を当てたのであって、「真謝」と書かれるべきものであったのではないか。ただ、この人物のことを「馬乗り真喜屋」としている類話の採集例（『瀬名波の民話』（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八二年）一六四頁）があり、「馬乗り真和志」と表記している例（『佐敷町史』二（民俗）（佐敷町役場、一九八四年）五〇八頁）もあって、後者であると「まーじ」と聞きとられていると思われる。したがって、伝承されるこの人物の名前に「まーじゃ」から「まーじ」または「まぎや」までの若干の振幅があるとも考えられる。

1 『宜野座村の民話』伝説篇(宜野座村教育委員会、一九八七年)三一
八頁、『恩納村の民話』伝説篇(恩納村教育委員会、一九八二年)一七
五頁、『北中城の民話』(北中城村教育委員会、一九九三年)三七一頁、
『瀬名波の民話』一六四頁。

2 『那覇の民話資料』第四集(首里地区)(那覇市教育委員会、一九八
二年)一三五頁、伊芸弘子編著『沖繩・首里の昔話』(三弥井書店、一
九九二年)一五二頁。そのほか、『具志川市史』第三卷(具志川市教育
委員会、一九九七年)二二三頁にも名前が見える。

13 『那覇今昔の焦点』(沖繩文教出版社、一九七一年)三〇〇頁。

14 『佐敷町史』二・五〇八頁。注10参照。

15 注10参照。

16 注25参照。

17 『屋部の民話』(名護市教育委員会、一九九〇年)三三八頁。

18 『渡嘉敷ペークー話』。注1参照。

19 『那覇市史』資料編第一卷五「家譜資料」(那覇市役所、一九七六年)。

20 名護市屋部の伝承(↓2・2)に登場していた「馬乗りの名人・野
国里之子」は「武姓家譜」の「野国親雲上」の変形かもしれない(里
之子、親雲上はいずれも琉球王府に与えられる位階であるが、後者の
ほうがはるかに高位)。

21 沖繩門中大事典』(那覇出版社、一九九八年)二二七頁等参照。

22 『武姓家譜』順治元年、同二年、同一三年、康熙二二年。

23 その後、口頭伝承の世界でもこの中黒馬と野国親雲上宗保の話は伝わ

っている。嘉陽姓の語り手による、「武姓家譜」そのままの語り(『具
志川市史』第三卷・七四二頁)もある。おそらく、家譜の写しなどを
子孫の人々が所持し内容を記憶しているのであろう。

24 『沖繩タイムス』「自了の『馬の絵』」。注4参照。なお、仲里は久米島
にあった間切の名(現在仲里村)である。

25 尚穆王代(二七五二―一七九四)にも「野国名馬・鹿毛急車」と「仲
田青毛」の絵()が描かれ、慎思九・泉川寛英(一七六七―一八四
四)も「野国名馬図」(鎌倉芳太郎『沖繩文化の遺宝』(写真)(岩波書
店、一九八二年)二九五頁)を描いた。なお、自了「野国馬図」(注4
参照)の右側の馬、「尚穆王代 野国名馬・鹿毛急車」、慎思九「野国
名馬図」は酷似する絵となっている(同一、類似の粉本によっている
などの事情があるか)。

26 遠藤庄治編『よなばるの民話』(与那原町教育委員会、一九九〇年)
二二二頁。

27 『よなばるの民話』二三四頁。注26参照。琉球王府、琉球国王が馬を
召し上げるとするのが足速馬の伝承の基本のようであるが、琉球王府
が薩摩藩に取ってかわっている例もある(二二三頁)。

28 『佐敷町史』二・五〇二頁。注10参照。

29 喜舎場永珣『八重山民俗誌』下巻「由来記篇」「碑文記集」(沖繩夕
イムス社、一九七七年)。

30 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』第二六卷(沖繩)(同朋舎出
版、一九八三年)五四一頁をも参照。赤馬の伝承については、福田晃

他著『琉球の伝承文化を歩く』一「八重山・石垣島の伝説・昔話（一）」
（三弥井書店、二〇〇〇年）一三頁にも言及がある。

³¹ たとえば、『日本民謡大観（沖縄・奄美）』八重山諸島篇（日本放送出版協会、一九八九年）四四二頁参照。

³² 倉田隆延「南島の笑話モーイ親方をめぐって」『相模国文』一一号、
一九八四年）参照。

追記 本稿は、二〇〇四年九月五日（日）、大谷女子大学にて行われた伝

承文学研究会大会にての口頭発表「継母の雪払い・高良タイユー」の後半部分をもとにしている。また、本稿は、一九九六年度、一九九七
〜一九九八年度・科学研究費補助金（奨励研究A、若手研究B）、二
〇〇一年度・小樽商科大学学長裁量経費（プロジェクト研究）の援助
によって行い、その後も行ってきた研究の成果の一部である。